米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く⑳

後鳥羽上皇伝説

―近江地域の奉納角力②―

近江地域の伝承地

鎌倉時代の承久二年（一二二〇）頃、日撫神社（顔戸）と山津照神社（能登瀬）に参拝して角力を見学されたと伝えられている後鳥羽上皇は、後白河天皇の孫にあたり、平家滅亡の際に壇ノ浦に身を投じた兄の安徳天皇に代わって即位し、第八二代天皇になりました。建久一〇年（一一九九）に土御門天皇に皇位を譲りますが、続く順徳・仲恭天皇と三代二三年間にわたり、上皇として院政をおこないました。鎌倉幕府の初期に京都の公家政権の実権を握っていた人物です。

しかし、承久三年（一二二一）、鎌倉幕府の執権・北条義時追討の院宣（命令）を出し、畿内や近国の兵を招集して承久の乱を起こしますが、二〇万と称される幕府の大軍に完敗します。隠岐島に流された上皇は、そこで崩御しました。承久の乱は、天皇・貴族によるそれまでの政治から、武家政権に替わる画期となりました。

上皇は建久一〇年と承久二年の二度、ひそかに名超寺（長浜市名越町）を訪ね、寺の僧に討幕の祈祷を命じたという伝説があります。二度目の密行時に、日撫神社、山津照神社に参拝したようです。さらに、米原市内には上皇の皇子の墓が二か所あります。蓮成寺（宇賀野）境内の宝篋印塔は、雅成親王の墓と伝えられています。願乗寺（中多良）の境内には「後鳥羽院ノ御子一ノ宮皇子之墓昭和一六年宮内省調査」の碑がある五輪塔があります。

このほかにも市内の後鳥羽伝説をあげると、福田寺（長沢）本堂の南に上皇の供養塔とされる宝篋印塔があり、表門を入った衝立式の目隠し塀も、参拝されたゆかりで建てられたと伝えられています。湯坪神社（高溝）もゆかりがあり、上皇が使った御手洗を湯坪といいます。高溝には上皇の爪を埋めたという経塚もありました。人塚山古墳（顔戸）の上の地蔵堂脇には、田植えを見られたときの腰掛石があり、人塚山を一説に鳥羽岡といいます。位山神社（舟崎）の山の下には、幕府の探索から一時身を隠したという洞窟があります。山東地域にも伝承があり、堂谷の観音堂を下りたところにある経塚は、かつてこの地にあった極楽寺の僧が小石に法華経を一文字ずつ書いて、上皇の眼病の回復を祈り埋めたと伝えられています。

黄牛塚古墳

上皇が日撫神社に参拝したときに黄毛の牛一頭が奉納され、その牛を葬ったと伝えられていたのが顔戸にあった黄牛塚です。ところが、昭和五〇年に北陸自動車道建設に伴う発掘調査で、六世紀末に造られた古墳であることがわかりました。息長の王が葬られた「王丘」に、いつのころか黄牛伝説が根付いたのでしょう。

さて、上皇の北近江来訪は、信ぴょう性のある資料では確認できません。後鳥羽上皇伝説が近江地域に色濃く伝わる背景には、米原市の箕浦荘が上皇の肖像を安置する後鳥羽上皇御影堂（大阪府島本町）の荘園だったことがあげられます。後鳥羽上皇の中三文字をとる長浜市鳥羽上町も御影堂領でした。また、正治二年（一二〇〇）、柏原荘の地頭職をつとめる柏原弥三郎の非行に対し、上皇が自ら命令して追討させたことも、米原市と上皇を結びつけます。これらのことから、奉納角力をはじめ市内の社寺や古墳、石塔の由来となったと考えられます。

（歴史文化財保護課）

▲ 発掘で見つかった黄牛塚古墳の石室